

特集 さあ、夏本番。

「祭り」が生み出す、地域の活力。

そろそろ、盛岡市内のあちこちで、夏祭りが催される季節。盛岡に限らず、東北各地で短い夏を盛り上げる祭りが次々と始まります。地元らしさが溢れる祭りは、観る者の心を魅了するものですが、規模の大小に関わらず、住民自身のパワーや運営経費が必要となり、祭りを続けていくことはそう簡単なことではありません。果たして、祭りが地域にもたらすものとは何なのでしょう。祭りの持つ「力」とは。いくつかの視点から考えてみましょう。



毎年、8月4日から7日まで開催される「盛岡七夕まつり」は、ゆっくりと歩いて楽しめる肴町らしい祭り。



「さんが動だとすれば、七夕は静。彩り鮮やかな吹流しは、作る側も心が癒される」と豊岡さん。

祭りは、町への愛着のカタチ

真夏の夜に響くさんさん太鼓の音色。今や「盛岡さんさん踊り」は、東北の夏を代表する祭りですが、それとは一味違った風情を楽しめるのが、肴町商店街の「盛岡七夕まつり」です。

「子どもの頃から、七夕祭りの季節が来ると、心躍るものがありました」。肴町商店街振興組合の理事長を務める豊岡卓司さんは、そんな風に話してくれました。肴町で商売を営む豊岡さんにとって、七夕祭りは物心ついた頃から始まっていたもの。かつては動く紙芝居や大がかりな仕掛けのアトラクションも多かったそうです。

遡れば、肴町で七夕祭りをするようになったのは大正時代とのこと。

「飾りのクヌ玉に使う竹を、昭和初期から使い続ける店もあるんですよ。祭りが終わるとすぐ、来年に向けて構想を練り始める店もある。七夕飾りの制作経費は各店の負担だから準備は大変ですが、皆、結構楽しんでやっていますよ」と豊岡さんは顔をほころばせます。各店が趣向を凝らし、思いおもしろい発想で作る飾りつけは、個性があつて見ごたえも十分。その時期の話題をテーマにしたり、洋服店ならカラフルな色合いを大切にするなど、それぞれの思いがカタチになっています。肴町住民にとって、七夕祭りは昔から続く町の伝統行事。一人ひとりに強い思い入れがあるのだと、豊岡さんは話します。

観るから参加する祭りへ

しかし、ここ十数年の間で、周辺にマンションが建つたり、商店主が自宅を郊外に移したりと、肴町の住人構成に変化が生まれています。七夕祭りにも新たな取り組みが必要となり、数年前から、市民参加できる企画を盛り込むようになりました。例えば、一般向けの募集によって集めた折鶴で、七夕飾りを作る試みもその一つ。これに参加した近所の学校や福祉団体が、自分たちの作った飾りを見るた

めに祭りを訪れるなど、商店街の住人という枠にとられない、祭りへの参加スタイルが生まれつつあります。

「商店街周辺の新築マンションや高齢者向け施設の住民の皆さんは、イベントがあれば気軽にアーケード街に足を運んでくれます。七夕祭りに訪れるのは、小さな子ども連れも多いので、ほとんどの露店は、クジ引きだとか金魚すくいとか。商店街の店主らが工夫して、家族的な雰囲気です。やはり子どもたちが通って楽しい笑顔が見られるのが一番。七夕祭りが商店街と近隣住民を結び接点になって、そこから交流のきっかけが生まれればいい」と豊岡さん。

かつての賑わいほどでないとはいえ、昨年は4日間でのべ



誰もが自由に、短冊に願いごとを書いて飾る企画。昔から続く、さりげない参加のかたちです。

18万人が訪れたという「盛岡七夕まつり」。商店街にとつてこの祭りは、伝統であると共に、さまざまな世代を呼びこむ大切なイベントになっているようです。

観光素材として、祭りの魅力は？

では、観光という側面から祭りを捉えた時、その魅力は、そして地元への経済効果がどれほど期待できるのか。JTB東北盛岡支店の取締役支店長・平塚正隆さんに、お話を伺いました。

「今年、私たちが取り扱う東北の夏祭りを組み込んだコースは122本あります。一つだけでなく、幾つかの祭りを一緒に楽しみたいというお客さんが多い。各地の祭りの中で最初に始まる『盛岡さんさ踊り』は4日間開催になり、商品として組み



『盛岡さんさ踊り』は、他地域とのつながり方も大事。横の連携によってアピール力も高まり人を呼びこむ可能性が広がるのでは」と平塚支店長。

込みやすくなりました。ただ、東北の祭りは大体が夜祭りだから、一日に2つを楽しめないでしょう。その代わり、日中は観光の時間ができる。『祭り』という魅力ある素材を有効に活かし、昼を楽しめる企画やイベントが増えると、盛岡周辺での回遊性も高まるのでは」と平塚支店長。旅行商品としての「盛岡さんさ踊り」の可能性に期待をかけます。とはいえ、東北の夏祭りで人気が高いのは「青森ねぶた」。ここ数年では、スケール感を誇る「五所川原立倭武多」が特に注目されているそうです。「迫力ある太鼓が見せ場の『盛岡さんさ踊り』は、観光客を惹きつける要素は十分。だからこそ、観るだけでなく参加しないと面白さは存分に伝わらない。観光客が気軽に参加できるきっかけがあるといい」と平塚支店長は話します。

参加型祭りを観光へ活かす

実は、JTB東北盛岡支店は、平成4年から毎年欠かさず、さんさ踊りに参加しています。その経緯について平塚支店長に尋ねたところ、旅先で観光客を受け入れる立場として「地元の祭りをもっと知ろう」という考えから始まったのではとのこと。



本格的な練習が始まる7月。さんさ太鼓の音は、夏の到来を教えてくださいます。



昨年からの「盛岡さんさ踊り」では、初心者や子どもに踊りを教える「おへれんせ師匠」が登場。より参加しやすい祭りを目指します。

社内には、小学校などで「さんさ」に慣れ親しんだ社員も多く、一から覚える必要がないことも長年参加が継続できる理由の一つかもしれません。そして、同支店では観光客向けにもオプシヨンで「さんさ踊り体験」を用意しています。5年前から始まったこの企画は、同社のツアー申込者の中で踊りに興味がある方が、JTBのさんさ踊りチームに加わって踊り体験ができるというもの。浴衣一式の貸し出しと着付け、さらに踊りの簡単な受講付きです。

「今は、旅行も参加型が主流。『盛岡さんさ踊り』は、自由参



加の輪踊りはあるけれど、踊りを知らない人と参加しにくい。祭りは参加することで、ぐっと地域や人が近くなるんです。弊社以外にも受け皿が増え、住民と観光客の一体感が得られる企画が盛り込まれるといい」と平塚支店長。祭りを通じて共有した時間は、観光客にとつても岩手への愛着につながるはずだと話します。

地域の祭りが育むもの

祭りは、そもそも神事から始まったもの。しかし時を重ねる中で、地域の特色を活かしたイベントとしての要素が強まり、

町の活性化にも役立っています。しかし、それは「自分たちが暮らす町への思い」があつてこそ。今回、さまざまな立場で祭りに関わるお二人の話を聞きながら、その愛着を育む連帯感は、祭りに参加することでより深まるのだと感じました。土地に根ざす文化そのものといえる祭りを守ることは郷土の誇りにつながり、それが地域のパワーになるはずです。暗いニュースが多い今だからこそ、地域経済に大きな弾みをつける意味でも、住民の活力の源である祭りを楽しみ、盛り上げていきたいと思います。

取材／SANSAN企画編集委員会